



Title	アイヌ民族に対するマイクロアグレッション : 博物館や技術講習会などの学習施設での体験
Author(s)	北嶋, イサイカ; Kitajima, Isayka
Citation	アイヌ・先住民研究, 3, 35-46
Issue Date	2023-03-01
DOI	https://doi.org/10.14943/Jais.3.035
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/88298
Type	departmental bulletin paper
File Information	05_3_Kitajima.pdf



【研究ノート】

アイヌ民族に対するマイクロアグレッション －博物館や技術講習会などの学習施設での体験－

北 嶋 イサイカ*

要 旨

アイヌ民族に対する差別は、以前はあからさまな表現であったが、現在は日常に溶け込み、見えにくい言動となった。発言者の意識の有無にかかわらず、マイクロアグレッション（小さな攻撃）がおこり、発言者さえ攻撃をしていると気付かないことがある。また、受け手もその言葉に小さな不満をもつが、それがどの言動なのか分からず、なぜ自分がイライラするのか理解できずに戸惑う場合がある。本稿は、その見えにくい攻撃について、発言者の言葉と受け手について考えられる感情を文字にすることにより視覚化し、どのような表現がマイクロアグレッションに該当するか記述する。

ここではアイヌ民族が受ける小さな攻撃に焦点をあて、第1節では、マイクロアグレッションの概要と3つの分類について述べる。第2節では博物館、第3節では技術講習会でおこるマイクロアグレッションについて、筆者の事例をあげ、考えられる感情について記述し分類する。第4節では博物館と技術講習会でおこるマイクロアグレッションについて考察した。

キーワード：アイヌ民族、和人、ハラスメント、マイクロアグレッション

はじめに

アイヌ民族である筆者は、現在博物館に勤務しており、前職では博物館関連施設の施設管理や学芸員業務を行った。そして技術講習会にて受講者という立場での参加、講師・助手・事務等の担当という主催者側の立場であったこともある。このような職歴のために博物館などの教育施設で、来館者などの知らない人から突然、民族性に関する悪意のない質問をされ、その発言に傷つき、返答で相手を傷つけていないか考える。この悪意のない一言を同族に相談すると、その発言について同情する人や怒る人、「それくらいよくあることだから我慢しなさい」と言う人がある。そして他民族の人たちに同じ相談をすると、「大変だったね」と同情する人もいれば、「他のアイヌ民族は気にしないのだから、気にしすぎだ」と言われることもある。この一連の流れは、みなさんにどう見えるのだろうか。ある日、突然に民族性を否定する言葉を言われる人はどのくらいいるのだろうか。民族

* アヌコロ アイヌ イコロマケル（国立アイヌ民族博物館）

性を否定され傷ついているのに、同族から「我慢しなさい」と言われるのはなぜなのだろう。民族性を否定されたから、組織として何らかの対策をしてほしくて上司に話をしているのに、同情で終わるのはなぜなのだろう。この一連の流れでたくさんの「なぜだろう」が頭をよぎる。

悪意のない質問でも、当事者は見下されたような気持ちになり、モヤモヤとした感情を抱え、時にはやりきれない気持ちがどの言葉や態度から湧いてくるのかわからないことがある。知人に相談すると、それはハラスメントを受けたからだといわれ、話をしていくうちにやっとどの言葉に傷つき、悪意のない言葉や態度のどれに反論したい気持ちになったのかが分かる。人と対話をしなければ、自分の傷ついた気持ちがハラスメントからきていることに気づけないことがあるのだ。

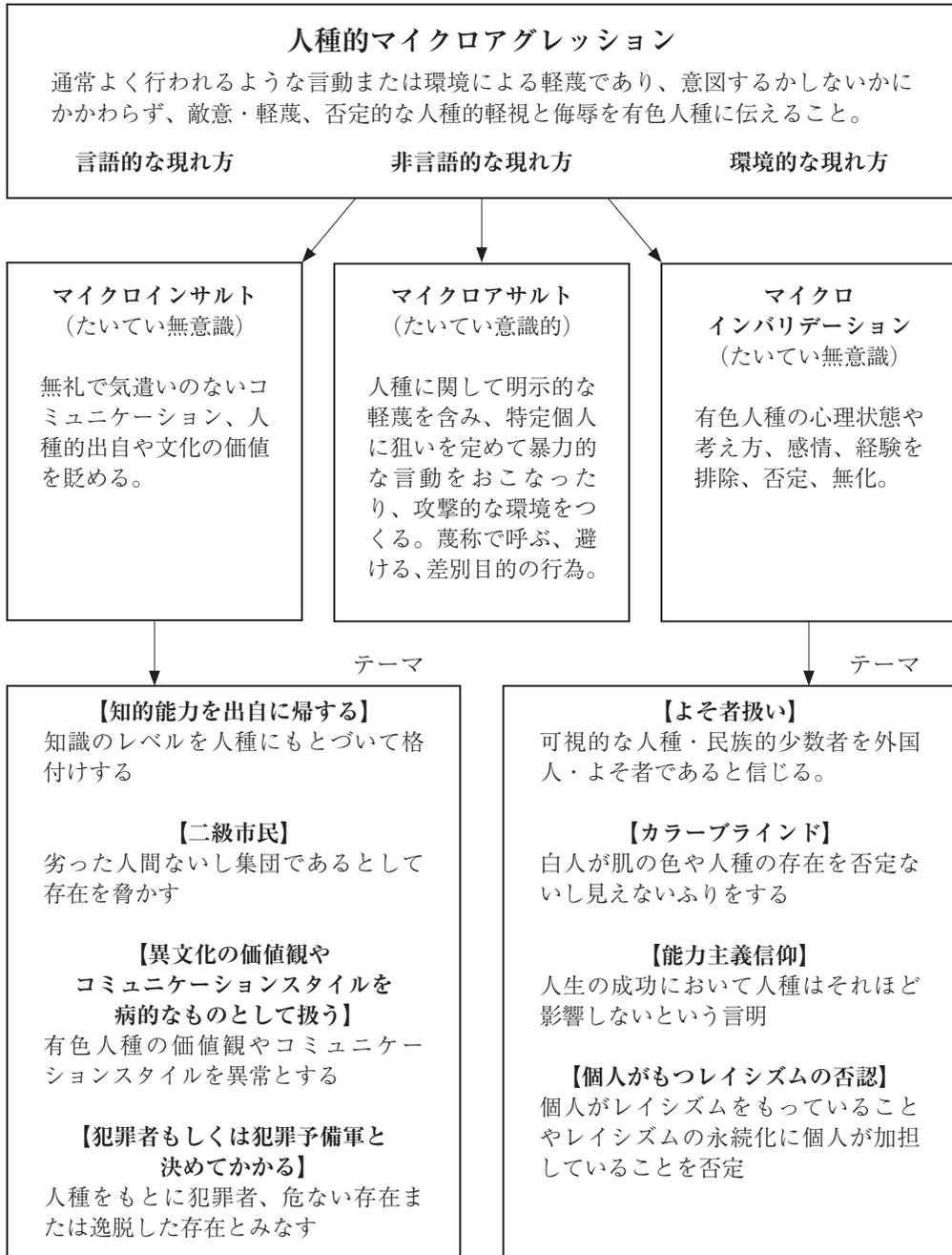
少し前までは、アイヌ民族に対する差別的な言葉を我慢するのが「当たり前」の社会状況だった。だが、2020年に「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」が制定され、アイヌ民族に対する差別的発言に対しても考慮される時代となった。ハラスメントについての知識も少しずつ増え、自分が他民族に対して「日本語が上手ですね」などのレイシャルハラスメントをしていたことを知った。ハラスメントという概念がなく、無知だったために相手を傷つけていたのだ。ここでは、アイヌ民族に対するレイシャルハラスメントやマイクロアグレッションについて筆者が経験した事例を基に考察する。日常生活の中で自分が誰かに対してハラスメントをしていないか考える手がかりになればと思う。そして、他人の発言でモヤモヤしているときは、無意識下で心の中の自分がハラスメントを認識する一方で、今までの経験がハラスメントと認めないという、心のバランスが崩れている状態かもしれない。ハラスメントが起こったことを理解し、自分を責めないヒントになればと考える。

1. マイクロアグレッションとはなんだろう

マイクロアグレッションという言葉を知ったことがあるだろうか。マイクロは「小さな」であり、アグレッションは「攻撃」である。この「小さな攻撃」は、なにげない日常会話の中での侮蔑的な行為で、意識的か無意識かにかかわらず、少数派である人種や民族、ジェンダーなどに対して向けられることが多い。そして発言者には悪意がないため、気付かぬうちに受け手の心を傷つけてしまうことがある。

デラルド・ウィン・スーの『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション 人種、ジェンダー、性的指向：マイノリティに向けられる無意識の差別』では、人種、ジェンダー、性的指向に対するマイクロアグレッションをマイクロアサルト、マイクロインサルト、マイクロインバリデーションという3つに分類している（スー、2020：69）。簡単に説明するとマイクロアサルトとは、たいいてい意識的であり、人種に関して明示的な軽蔑を含み、特定個人に狙いを定めて暴力的な言動をおこなったり、攻撃的な環境をつくる。蔑称で呼ぶ、避ける、差別目的の行為である。マイクロインサ

人種的マイクロアグレッションの категорияと関係図



デラルド・ウィン・スー『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション 人種、ジェンダー、性的指向:マイノリティに向けられる無意識の差別』より抜粋 (スー, 2020: 70)

ルトは、ほとんどが無意識のうちにおこり、無礼で気遣いのないコミュニケーション、人種的出自や文化の価値を貶める。マイクロインバリデーションもほとんどが無意識下でおこり、有色人種の心理状態や考え方、感情、経験を排除、否定、無化する。

上記の分類を参考とし、筆者が経験したアイヌ民族に対するマイクロアグレッションの事例をあげ、どのような状況でおこったかを書き記す。これは筆者がアイヌ民族関連の博物館やアイヌ民具の技術講習会などで経験したことである。なお1つの事例につき、複数の分類に該当することがあり、受け手により発言者の言葉について、意識的か無意識か判断が異なる場合がある。

2. 博物館でおこるマイクロアグレッション

博物館などでの展示解説のため来館者との対話時に経験した、マイクロアグレッションについて述べる。ここで重要なのは①来館者から質問などを受ける時間、②展示解説をする職員、③来館者である。①来館者から質問などを受ける時間は、現職では月に4～5回、1回につき1時間40分の間である。また、専門分野以外の質問を展示解説担当者が受け、その分野が筆者の専門の場合は呼び出され、それについて解説する時間もある。前職の場合は、定期的な展示室の点検時に、お客様から質問を受けた時間である。このような展示についての解説時におこったマイクロアグレッションについて述べている。②現職で展示解説をする職員は、和人やアイヌ民族、中国人、スペイン人などである。前職ではアイヌ民族や和人の職員が展示解説を担当していた。③博物館で展示について質問などを受ける場合は、質問者は大体が日本語で、言動から自分はアイヌ民族ではないと思っていると感じることから、質問者はおそらく和人だろうと推定する。

この状況は、マイクロアグレッションを言う側も聞く側もほとんどが初対面であり、今後、会うことはほとんどない。そして、サービスを受ける側（客）と提供する側（展示解説者）という立場があり、上下関係をお互いが無意識のうちに認識していることが多い。このような状況下で、どのようなマイクロアグレッションがおこり、それがどのような心の負担になるのかについて述べる。

以上を考慮するとタイトルで「博物館」となっているが、その他のアイヌ関連施設やアイヌ文化を発信するイベントでも起こりうるマイクロアグレッションであろう。

2-1 マイクロアグレッションの事例

次の事例について、受け手側がどのように感じているのか記述し、マイクロアグレッションの3つの分類のどれにあたるか考察する。ここでの事例は、発言者のプライバシーに配慮し、発言内容が変わらない程度に簡略化し記述している。

事例1：「縄文人を祖先に持つのは日本人も同じだから、アイヌ民族はいない」と言われ、説明し

ようすると、話を遮りその他の意見や質問をされた。

この事例はマイクロアグレッションの3つの分類の内、どれにあたるだろう。これは意見に対する説明を遮る「一方的な言動」であり、意図的に何らかのメッセージを伝えたいと受け取れる。このことからマイクロアサルトと考えることができる。

事例2：「もうアイヌ民族はいないんでしょ？」と聞かれ、著者がアイヌ民族だということを伝えようと、「何世なの？アイヌに見えない」と言われた。

事例1とは違い、話を遮らず意図的ではない発言だとしても、アイヌ民族として生きている人間が、「アイヌ民族はいない」と言われると、自分や家族の存在を否定されたと感じる。これは、カラーブラインド（多数派が少数派の人種や民族などの存在を否定ないし見えないふりをする）と考えられ、マイクロインバリデーションとなる。また、「アイヌに見えない」という発言もカラーブラインドとなりマイクロインバリデーションにあたるだろう。

事例3：来館者に対しアイヌ民族が受けた差別の説明をしていると「私（来館者）の友達にアイヌ民族がいるが、アイヌ民族として見ていない。同じ日本人だから差別意識を持ったことがない」と教えてくれた。

この事例は、悪意を感じられず、思いやりからの言葉と受けとることができる。しかしその一方でアイヌ民族のほとんどが、日本の国籍を持つ日本国民だが、その中のアイヌ民族だということを無視しており、それを言われたアイヌ民族のアイデンティティを攻撃している可能性がある。このことからカラーブラインドと考えられ、マイクロインバリデーションにあたるであろう。

事例4：「本物のアイヌだけを応援したい。純粋なアイヌはいるのか。」と質問されたので、本物や純粋の定義を聞くと、混血していないアイヌ民族だと教えてくれた。開拓のために本州から北海道に来た人が、気候に適応できず、本州に戻る時に子供を置いていった人がいると聞いたことがある。その子供をアイヌ民族が育て戸籍に入れた場合は、戸籍謄本を見るとアイヌ民族の子と読み取れるが、その人をアイヌ民族と考えていいのか聞いた。すると「もしかしてナイーブな問題に触れたのでしょうか。ただ本物のアイヌ民族を純粋に応援したいという気持ちだった。」と言われた。

この事例については無意識下の質問であり、質問者の「応援したい」という思いやりの気持ちが伝わってきた。だが、質問者がいう「本物（純粋）のアイヌ民族」という発言をどうとらえるべき

か。北海道の多数者がアイヌ民族だった環境が崩れたのは、どのような社会状況からなのか、アイヌ民族がたどった歴史を考えると、当事者が望んだことではないと考える。

筆者はアイヌ民族という言葉を知り、親族にその言葉の意味を聞いた時に自身の出自を知った。その時（筆者が小学校5年生の頃）から私はアイヌ民族なのである。アイヌ民族であったために経験した、嫌なこともいいことも全て含めて、アイヌ民族である私のアイデンティティそのものとなった。

筆者は、札幌大学のウレシバ奨学金制度¹を使い入学した。そして、ウレシバクラブ²に所属し、アイヌ文化を身につけ発信するため、アイヌ語やアイヌ民族の歴史や文化を学んだ。そこには父親がアイヌ民族で母親が外国人、育ったのは外国と本州というアイヌ民族の学生がいた。ウレシバクラブの学生たちは何の疑問もなく、アイヌ民族だと受け入れ共に活動した。だが、この学生も筆者も事例2に照らし合わせると、本物（純粋）のアイヌ民族ではないことになる。先祖代々アイヌ民族でなければ、偽物のアイヌ民族になるのだろうか。アイヌ民族である私を否定されるのは辛いことである。

事例4の「本物のアイヌ」という発言については、その人の存在や経験を排除、否定していることから、マイクロインバリデーションと考えられる。

2-2 レイシャルハラスメントとマイクロアグレッション

レイシャルハラスメント（人種的嫌がらせ）とは、国籍や皮膚の色、出身地、民族的出自や信仰など多様な人種・民族的要素に基づくハラスメントのことをいう。金明秀の『レイシャルハラスメントQ&A—職場、学校での人種・民族的嫌がらせを防止する—』によると、レイシャルハラスメントは法廷闘争を通じて発達してきた概念であるのに対し、マイクロアグレッションは日常的なコミュニケーションの中で生じる、軽度の差別的な事象とそれによって被る、心理的な被害を説明するために用いられるとあり、マイクロアグレッションはレイシャルハラスメントの一つの形態だとしている（金、2018：38）。また、個々の言動は些細で取るに足りないと言われ、受け手はそれにより大きなダメージを受けたと言えず、訴えても過剰反応だと逆に非難されたりする。この受け手と話し手の認識のギャップこそがマイクロアグレッションの特徴だとされる（金、2018：41）。

1 ウレシバ奨学金制度とは、アイヌの若者に対し、授業料相当額を給付する制度。アイヌの若者に高等教育及び自民族の文化や歴史を学ぶ機会を提供することを目的としている。

2 一般社団法人札幌大学ウレシバクラブとは、学生だけでなく一般市民や志の高い企業とともに、ウレシバ・プロジェクトを推進する組織。ウレシバ・プロジェクトとは、札幌大学にアイヌの若者たちを毎年一定数受け入れ、未来のアイヌ文化の担い手として大切に育てるとともに、多文化共生コミュニティーのモデルを作り出そうとするユニークな試みのことをいう。

注1および2の詳細は一般社団法人札幌大学ウレシバクラブのホームページ参照<http://urespa-club.com/concept.html>

事例5：「アイヌ民族の特徴は？」と聞かれ、文化的な特徴の質問か聞くと、身体的な特徴を教えてくださいと言われた。身体的特徴の一つとして毛深いといわれていると伝えると、服を脱いで毛深いを見せるよう言われた。拒否すると、アイヌ民族のことを学びたいのに見せないのはおかしいと言われた。

事例6：旅行会社の職員から「アイヌ民族の特徴を簡単に説明してほしい」と言われた。その特徴は、生活様式なのか、信仰なのか、何に対する特徴なのか聞いたが、質問者は返答に困っていた。筆者もどうすればいいのかわからず、例として「日本人の特徴を一言で説明するとどんな感じですか？」と聞いた。すると「説明できない」とのことだった。ツアーのお客さんからアイヌ民族の特徴を簡単に説明してほしいと言われて困っているとのことだった。

事例5の状況は、はじめは笑顔で話しかけられ、拒否したとたん攻撃的になった。服を脱ぐこと自体が、毛深いか否かにかかわらず許容できることではない。アイヌ文化を学ぶためという理由で、服を脱ぐことと毛深い体を見せることを強要していいことではない。このことから暴力的な言動であるため、マイクロアサルトと考える。受け手によってはレイシャルハラスメントととらえる可能性があるが、ここではレイシャルハラスメントに近いマイクロアサルトとする。

事例6は、悪意は感じられず、仕事としての責任感からの発言だと受け取った。だが、アイヌ文化や民族の特徴は、一言で説明できることではなく、アイヌ民族を知らない人に単純化し説明することにより誤解が生じ、それが固定概念につながる可能性がある。これは、無意識の発言でマイクロアグレッションと受け取れる。そして、アイヌ民族をよそ者ととらえていると感じることから、マイクロインバリデーションと受け取れる。

嫌がらせや差別などのレイシャルハラスメントと無意識のうちにおこるマイクロアグレッションでは、一見マイクロアグレッションの方が心の負担が少なく感じる。だが、レイシャルハラスメントやレイシャルハラスメントに達しているマイクロアグレッションはその場で抗議できるが、マイクロアグレッションは最小限の我慢で済むことから放置され、小さな負の感情として蓄積することが多い。そのためマイクロアグレッションを受け続けると、発言した人にとっては日常の些細な始めての一言でも、受け手からすると蓄積され続けた言葉の塊となり、感情が爆発しトラブルがおきたり、精神的ストレスから病気になる可能性がある。

3. 技術講習会でおこるマイクロアグレッション

筆者が木彫や刺繍の技術講習会に通い始めた、2008年頃から現在に至るまでの期間に経験した、マイクロアグレッションについてここで述べる。こうした講習会は、短期間で終わることもあれば、

長期間にわたることもある。ここでいう短期間とは、4～5回開催される1か月程度で終わる講習会のことであり、長期間とは12回程度開催される3～4か月間の講習会、あるいは毎年講習会に参加し顔を合わせることをいう。そして、そこでは筆者は受講者であったり、講師または助手、あるいは開催者であったりし、上下関係はその時により変わることがある。ここでの事例は、発言者のプライバシーに配慮し、発言内容が変わらない程度に簡略化し記述している。

事例7：講習会でアイヌ民族であるとカミングアウトしたときに、「アイヌに見えなくてよかったね」と言われた。

この発言は、人間関係が築かれていることから、悪意がないとわかり嫌な気分にならないが、モヤモヤする気持ちが残る。これはアイヌに見えると差別などの悪いことが起こるため、アイヌに見えなくてよかったというように受け取れる。アイヌというのは、低い立場の人間というように感じるため、これはマイクロインサルトと考える。また、その人がアイヌ民族として生きていることを否定している一面もあるため、マイクロインバリデーションの可能性もある。

事例8：博物館収蔵資料や作り手が作ったモノを見て、「この資料は偽物だ。このような技法は見たことがない」と言われた。

これは発言者が見てきたモノや習ってきた技法と博物館資料や作り手が作ったモノが違うことから、偽物だと判断したと考えられる。無意識の発言であるが、親族間で文化伝承を行っている人たちが、両親などに教えてもらった技術を偽物だといわれたらどのような気持になるのだろう。アイヌ文化には地方差や個人差などがあるため、偽物だと言い切ることができない。文化の価値を個人の経験値で判断し貶めているように感じることから、マイクロインサルトと考えられる。

事例9：たくさんの技術講座に参加してきた。その講座ごとに教え方や技法が違うから統一してほしいと言われた。

日本の茶道や華道などは、たくさんの流派があり、それをほとんどの人が許容している。アイヌ民族の作り手は、複数の師匠から習った技術を全て大切にしたいと考え、後世に技術を伝えたいと願っている。自分たちの文化の技術は多数あっても構わないが、アイヌ文化の技術は統一してもいいというのは、アイヌの物づくり文化を脅かす恐れがあるため、マイクロインサルトと考えられる。また、アイヌ民族の作り手の技術伝承経験を否定していると見えるため、マイクロインバリデーションである可能性がある。

4. 博物館と技術講習会でおこるマイクロアグレッション

先述した事例を下記の表にまとめると、博物館での事例は6件と事例2で2つの例を扱っているため1件分足し、合わせて7件とする。内マイクロアサルトが2件、マイクロインバリデーショナル5件となった。講習会での事例は3件、内マイクロインサルトが3件、マイクロインバリデーショナルの一面があるものを「△」とし、それが2件となる。

		発言	マイクロアサルト	マイクロインバリデーショナル	マイクロインサルト
博物館	事例1	アイヌ民族はいない（意識的）	○		
	事例2-1	アイヌ民族はいない（無意識）		○	
	事例2-2	アイヌに見えない		○	
	事例3	アイヌ民族として見ていない		○	
	事例4	本物・純粋なアイヌ		○	
	事例5	アイヌ民族の特徴（意識的）	○		
講習会	事例6	アイヌ民族の特徴（無意識）		○	
	事例7	アイヌに見えなくてよかった		△	○
	事例8	偽物の資料・見たことのない技法			○
	事例9	教え方や技法の統一		△	○

マイクロアグレッションの3つの分類に照らし合せ、博物館と技術講習会の2つの場所でおこった事例について考える。受け手と発言者が継続的な関係かその場限りの関係かで、マイクロアグレッションの種類に違いが出ている。

博物館のその場限りの関係の場合はマイクロインバリデーショナルが多い。また、講習会にマイクロアサルトがみられないことから、博物館でおこるマイクロアグレッションの特徴の一つと考える。マイクロアサルトは、攻撃の大小問わず意識的かつ意図的なものである。そしてマイクロインバリデーショナルは、人種やジェンダーなどに関わる現実を直接かつ陰険に否定すると考えられ、多くの場合、3つのマイクロアグレッションの中で最もダメージが大きくなる可能性があるとされている（スー、2020:78-79）。以上のことから「博物館で来館者との間におこる」マイクロアグレッションは、受け手のダメージが大きくなると考える。

技術講習会の継続的な関係の場合はマイクロインサルトが多くみられるが、マイクロインバリデーショナルも含まれる場合がある。マイクロインサルトはかすかな無視のようなもので表現され、話し手は無意識のことがほとんどであり、受け手に対して、隠された侮辱的なメッセージを伝えるとされる（スー・2020:74-75）。このように技術講習会のような人間関係が続く場合は、1回のダ

メージは小さく見落としがちだが、モヤモヤしたものが大きくなる可能性がある。

ここで扱った事例は、筆者の経験の中の一部であり、筆者以外の経験について触れていない。本来であればより多くの事例をあげ、統計的な検討が必要である。だが、こうした事例を公にすることはリスクを負う可能性があるため、筆者以外の事例を扱うことができなかった。今後の状況を見て、マイクロアグレッションに関する聞き取りが実施可能であったら行動したいと考える。キム・ジへの『差別はたいい悪意のない人がする 見えない排除に気づくための10章』では、公平性について次のように書かれている。

私はどこに立って、どんな風景を見ているのか。私が立っている地面は傾いているのか、それとも水平なのか。もし傾いているなら、私の位置はどのあたりなのか。この風景全体を眺めるためには、世の中から一歩外に出てみなければならぬ。それができないのなら、この世界がどのように傾いているのかを知るために、私と違う立ち位置に立っている人と話しあってみなければならぬ。(キム、2022: 41)

このようにアイヌ民族のみの調査では、公平性は保てないと考えられることから、他民族の人たちからも聞き取り調査をし、様々な視点からマイクロアグレッションを考える必要がある。

おわりに

本稿執筆の動機は、マイクロアグレッションで傷ついているアイヌ民族は、私だけではないと考えたからだ。マイクロアグレッションを受けた時の気持ちは視覚化できない。筆者がしたように文字化し整理することにより、自分の状況や原因がわかり、モヤモヤの解消につながればと願う。そして、マイクロアグレッションなどの発言者も無意識の発言のため、なぜアイヌ民族が傷ついているのかわからず、発言した人さえも傷ついているように感じる。この悪循環を少しでも解消するためには、アイヌ民族がマイクロアグレッションと受け止める発言と気持ちを知ってもらうことが重要だと考えた。筆者はアイヌ民族代表ではないので、全てを伝えることはできないが、参考になればと考える。そして、筆者もアイヌ民族以外の人たちにマイクロアグレッションをしていないか考える必要がある。相手の考えを全て理解するのは不可能なため、対話や聞き取り調査などにより実態を知ることが必要だ。この実態を調査し、民族共生の道を切り開く役目をウポポイ（民族共生象徴空間）は担っているのだと考える。

参考文献

北原モコットウナシ

- a, (2022) 「アイヌ・和人への手紙 (2) アイヌ・和人の当事者性－付 A アイヌ文化の真正性 付 B 対談：アイデンティティ・当事者性について」『アイヌ・先住民研究』 2:103-140.
- b, (2022) 『つないでほどもく アイヌ / 和人』北海道：北海道大学・アイヌ先住民センター.

金友子 (2021) 「日常をとりまくレイシズム」『レイシズムを考える』東京：株式会社共和国. 029-052.

キム・ジヘ (金知慧) (2022) 『差別はたいてい悪意のない人がする一見えない排除に気づくための 10 章』東京：株式会社大月書店.

金明秀 (2018) 『レイシャルハラスメント Q & A－職場、学校での人種・民族的嫌がらせを防止する』大阪：株式会社解放出版社

デラルド・ウィン・スー (2020) 『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション 人種、ジェンダー、性的指向：マイノリティに向けられる無意識の差別』東京：株式会社明石書店

(2022 年 10 月 1 日受付、2023 年 1 月 5 日審査終了)

Microaggressions against the Ainu People

– Experiences at museums, technical workshops,
and other learning facilities –

Isayka, KITAJIMA *

ABSTRACT

Discrimination against the Ainu people used to be overt, but now it has become so integrated into daily life that it is difficult to see. Microaggressions occur whether the speaker is aware of it or not, and even the speaker may not realize that he or she is being offensive. The listener may also experience unease and discontent about certain words, but may not know exactly which words or actions these are to blame, and may be confused as to why he or she is annoyed. This paper describes invisible attacks by visualizing the speaker's words and possible feelings about the receiver by writing them down, and describes what kind of expressions fall under the category of microaggressions.

In Section 1, we provide an overview of microaggressions and three classifications of microaggressions. Section 2 describes the author's case of microaggressions occurring in a museum and Section 3 describes and categorizes the potential feelings of microaggressions occurring in a technical workshop. Section 4 discusses microaggressions in museums and technical workshops.

Keywords: Ainu people, Wajin (japanese people), Microaggression, Harassment

* National Ainu Museum